

『平安初期物語に見える恋愛のグローバル化』

Martin Tirala (ティララ・マルティン)

物語というジャンルが9世紀の終わりに現れたということは『源氏物語』の作者である紫式部の言葉でも証言されているが、具体的には、「竹取の翁は物語の出しはじめの親」と書かれている。言い換えれば、9世紀の終わりに作られた『竹取物語』は最も古い物語ということになる。この最古の物語は他の平安初期物語と同じように幾つかのモチーフを展開しているが、その中で最も多く書かれているのは恋愛についてである。恋愛は平安初期物語の唯一のモチーフではなく、メインテーマであったと考える。恋愛は全ての物語の共通テーマとして様々な視点から描かれている。そして古今和歌集などの勅撰集の和歌に比べ、より深く描写されている。しかし、貴族階級の人々の一般的な恋愛の経験と違い、恋愛のスキャンダルの場面に集中して書かれている。作物語の場合も歌物語の場合も、主人公の恋愛に関する考え方と、主人公と他の登場人物の行動は基本的にスキャンダルのと思われる。例えば『竹取物語』の女主人公であるかぐや姫は、平安時代に大変重視されていた婚姻という概念を全く拒否している。また『伊勢物語』の主人公である昔男は天皇の妃になる女性に恋したり、伊勢の斎の皇女に恋したりし、自分の妹まで恋している。このようなモチーフはスキャンダルのだけでなく、タブーを犯す行為である。このようなタブーを犯す話を別として、平安初期物語に見える恋愛観は現代社会に出現している。もともとスキャンダルであったことが、現代ではスキャンダルではなくなり、一般的になってきていると思う。この発表では、平安初期物語に見える恋愛の様々な話を他の文化圏の人々に理解できるか、欧米などの人に受け入れることができるか、このような考え方はグローバル化しているのではないか、という問題を、物語の具体例をあげながら、考究したい。